

古代メソポタミアの神像の口洗い儀礼

細 田 あ や 子

はじめに

古代メソポタミアのミス・ピー（口洗い *mīs pi*）と呼ばれる宗教儀礼は、新しく神像が制作されたとき、あるいは破損した神像を修復する際、神像の口を洗うという所作を中心とした一連の儀礼である。洗う行為は浄化、聖化に結びつくが¹、口洗いと並び、さらにピート・ピー（*pūt pi*）という口開けの行為も行われていた。儀礼のなかで唱えられる文言に「この像は、口開けがなければ、香をかぐことができない、パンを食べることも水を飲むこともできない」という一節がある（シュイラ①70ab-71ab）²。口開けは、ものとしての像に生命力、生の機能を与える機能を強調する。とくにバビロニアの儀礼用語では、口洗いと口開けの儀礼をあわせてミス・ピー、口洗い儀礼と一般にいられている³。

口洗い儀礼そのものは紀元前3千年紀頃までさかのぼると考えられるが、儀礼の内容が記された、現在発見されている粘土板は紀元前8～5世紀のものである⁴。本稿では、先行研究にもとづきながらこの儀礼の構成を確認し、ものとしての像と生命を持った神との関係や、人の手による像から生きている神への変容、天上における神の誕生、また像を制作した職人と職人の神々との関係など、口洗い儀礼のいくつかの特徴について考察する。

¹ Hurowitz 1989, 39-89; Sallaberger 2006-2008, 295-299; Guichard/ Marti 2013, 82ほか。

² 粘土板の番号や校訂版のページについては、本稿の最後を参照。

³ Berlejung 1998, 196-197; Walker/ Dick 2001, 17.

⁴ Walker/ Dick 2001, 27.

1. 儀礼文書と祈禱文書

口洗い儀礼の内容は、儀礼執行者（アーシブ *āšipu*, マシュマシュ *mašmaššu*）に対する指示書から知ることができる。儀礼においてアーシブがどのような順序でどのような所作をすべきか、神像をいつ、いかなる場所に設置するか、供え物の種類や方法、唱えるべき祈禱の文言や時間などについて記された式次第文書（儀礼文書）がある。これは、「あなたは……する」（または「……すべきである／しなければならない」という表現で、2人称の人物（男性、単数形）に対して指示を出す形式で書かれている。さらにこの儀礼文書のほかに、儀礼のなかで唱える祈禱（シュメール語で *ÉN*, アッカド語で *šiptu*）の内容が書かれた祈禱文書がある。口洗いで唱えられる祈禱のなかには、他の儀礼で唱えられるものもある。

口洗い儀礼の儀礼文書と祈禱文書は、ニネヴェ（現クンジク）、アッシュル、フジリーナ（トルコ、スルタンテペ）、ハマー（シリア）、バビロン、シッパル、カルフ（ニムルド）、ウルクから出土している。その大部分は、ニネヴェから出土したもので、紀元前7世紀の年代である。祈禱文書の奥付（コロフォン）から、それらはニネヴェにあったアッシリア王アッシュルバニパルの宮廷附属図書館に属していたことがわかる⁵。ニネヴェから出土した25点ほどの粘土板の断片をあわせ再構成されたものが、ニネヴェ版儀礼文書として編集されており、204行ほどの内容になっている。だが儀礼の最後まではわからず途中で終わっている。

他方、バビロニア版儀礼文書は、バビロンで発見された1点の文書である（BM 45749）。縦13.2 x 横9.0 cmの粘土板で、表に35行、裏に35行、合計70行書かれている。書体からおよそ紀元前6世紀と考えられ、バビロニア版はニネヴェ版の儀礼文書のほとんどの断片より100年後のものである⁶。

像、神像を意味する語はシュメール語で *ALAM*, アッカド語で *šalmu*だが、文

⁵ Walker/ Dick 2001, 27-28.

⁶ Walker/ Dick 2001, 70; 笠谷2012, 9-13（邦訳）。

書のなかで神像をさす際に神 DINGIR/ *ilu* という語が用いられている場合も多く見いだされる。これはそのコンテキストから神像か神のどちらを意味しているのかとらえる必要がある⁷。たとえば「唱えごと：神（DINGIR）が作られたとき、清らかな像（ALAM）が完成されたとき」（シュイラ①49ab）といわれている場合は、神と新しく作られた神像はおそらくは同等のものみなされている。

2. 口洗いおよび口開け

ニネヴェ版儀礼文書には口洗い（ミース・ピー）と並び、ピート・ピーという口開けもつねにあわせて記されており、口洗いと口開けが一对の所作として行われていることがはっきりしている。バビロニア版では口洗いしか言及されていないが、そこには口開けも含まれていると考えられることは、すでに述べたとおりである。

口洗いは、神像のみに行われたわけではなく、王や祭司、ごく普通の私人、雄牛、羊などの動物、つまり生物に対してもさまざまな儀礼で行われた。雄牛の口洗いは、その皮が太鼓などに用いられる際の儀礼、羊の口洗いは、神殿設立のための儀礼などで行われた。さらに王の地位を示す表章（王冠、笏など）や、革袋、松明など無生物のものに対してもなされた⁸。

一方、口開けの対象も神像に限らない。こちらは生物に対してはなされず、無生物に対してのみである。魔除けのための人形や、神託を受けるための道具としての革袋、神々の武器、月の神の象徴の三日月の形をしたものなども、口開けが施された。口開けとは機能の開始、影響力を行使しはじめることを象徴的に示す⁹。

神像に対する実際の口洗いおよび口開けは祈祷文書にある祈りからわかるように、儀礼の過程でおそらく14回行われたと考えられる。その文言は以下のと

⁷ Berlejung 1998, 62-66.

⁸ Borger 1956, 89, 91; Selz 1997, 177, 179; Berlejung 1998, 182-183, 191-192 Dick 2003-2005, 581-583.

⁹ Berlejung 1998, 188-191, 281ほか; Walker/ Dick 2001, 10-15.

おりだが、これはアーシブが神像の周りで神像に向かって唱える文言であり、「あなた」といわれているのは神像をさす。

アプカル祭司 (*apkallu*)¹⁰ とエリドゥのアブリク祭司 (*abriqu*)¹¹が、蜂蜜とバター (ギー) で、スギとイトスギでもって、あなたの口を7回かける2回開けた (シュイラ①92-93)。

イシップ祭司 (*išippu*)¹²、パシーシュ祭司 (*pašišu*)¹³、アプカル祭司、エリドゥのアブリク祭司が、蜂蜜とバター (ギー) で、スギとイトスギでもって、あなたの口を7回かける2回開けた (シュイラ③14ab-15ab)。

この「7回かける2回」、すなわち14回という数字は、バビロニア版儀礼文書に記されている口洗いの回数と一致する。他方ニネヴェ版では5回の実行が記されている。ニネヴェ版では途中までしか文章が残っておらず、儀礼の最後の部分が不明だが、A. ベーレユングはバビロニア版の並行箇所からみて、ニネヴェ版で抜けている部分の82-87行目と最後の失われた部分にそれぞれ1回ずつ、口洗いおよび口開けの記述があったのではないかと推測している。したがって、口洗いと口開けはニネヴェ版では合計7回行われたと考えられる¹⁴。

するとここで注目されるのは、上述した祈祷文書のテキストで口開けの数を数え上げる際、「7回かける2回」と表現し、7の数字を強調しつつ14回という回数を表していることである。この表現には、メソポタミアにおける数字に対する考えが出ていとされる。7は、7柱の神、呪術では7回の呪文・祈祷が唱えられるといったように、メソポタミアでは7という数字は最も重視されていた¹⁵。したがってニネヴェ版では、口洗いおよび口開けは14回ではなく、その半分と

¹⁰ 賢者、専門家、祭司。

¹¹ 祭司。

¹² 浄化の祭司。

¹³ 塗油の祭司。

¹⁴ Berlejung 1998, 234.

¹⁵ Black/ Green 1998, 144-145.

いう数字（7回かける2回の半分）、かつ呪術や儀礼で重視されている7という数字の回数を保持していたと考えられるという¹⁶。

3. 口洗い儀礼の順序

ニネヴェ版（N）、バビロニア版（B）の儀礼文書および多くの断片の祈祷文書から口洗い儀礼の内容が再構成されている。これらの文書をあわせてみると、儀礼は2日間かけて行われていることがわかる。ニネヴェ版儀礼文書のはじめには、当日の夜明けから郊外や庭、川岸、神殿などでのアーシプによる準備が詳しく記されているが、それはバビロニア版にはない。バビロニア版は神像が作られた場所、職人の工房（作業場）における所作の記述から始まっている。

儀礼の準備がなされたあと、新しく制作された神像は工房から川岸へ、川岸から庭へ、庭（果樹園）から神殿、さらに至聖所（神像が座する場、玉座）へと場所を移動するが、そのたびごとに行列が行われている。その途中途中の場でアーシプが、口洗いと口開け、それに使うものの浄化の儀礼、神々への供え物、祈祷・唱えごとなどを行う。像は最終的に神殿の至聖所において生きた神として即位する。

口洗いと口開けの儀礼について包括的な研究をしたベーレユングによると、この儀礼は大きく3つの段階に分けられる。さらにその3段階は、神像の行列などによる場所の移動により11の場に区分される¹⁷。儀礼全体の区分けについては、儀礼文書の校訂版を出版したC. ウォーカーとM.B. ディックもベーレユングの説に依拠しているので¹⁸、ここでも踏襲する（本稿末尾の表を参照）。なお3段階の名称のうち、IとIIは神像と神々との関係を示すのに対し、IIIは神像が置かれる場所を示しており、若干不統一だが現時点ではベーレユングに従う。

¹⁶ Berlejung 1998, 234. 古い時代においては7回だったものが、次第に数が増えて14回になったと考えられるだろうか。

¹⁷ Berlejung 1998, 197, 212-259.

¹⁸ Walker/ Dick 2001, 29-30ほか。Walker/ Dick 1999, 55-121とくに72-83における見解を撤回している。

I エア段階 (I-1～I-4) (N1-94, B1-12)

口洗い儀礼は、アーシブが郊外、川岸のある庭、町、神殿で、儀礼の準備をすることから始まる。儀礼当日の明け方にアーシブはこれらの場所のあいだを行き来しながら、儀礼に用いる材料や道具のための祈禱を唱え、もろもろの事前準備がなされることがニネヴェ版から知られる (I-1)。次に神像を制作した職人たち (*ummānu*) の工房 (作業場) に移り、地面を掃き清め、清らかな水をまく (I-2)。ニネヴェ版では、エア (知恵と真水の神)、アサルヒ (マルドゥク)、そしてこの神のために杜松 (ネズ) の香炉を3点準備し、極上のビールを捧げ注ぐ。バビロニア版では、清められた水の容器を2個準備し、その神像の前に赤い布を、右側に白い布をかける。エアとアサルヒのために供え物を準備する。そして神像に対して第1回目の口洗いおよび口開けが行われる。さらに香炉や松明が清められ、祈禱が唱えられたあと、職人の工房から川岸へ神像が行列によって移動する (I-3)。川岸に到着すると (I-4)、アーシブが神像を葦の敷物のうえに西向きに置く。エア、アサルヒ、この神のための供え物が準備される。雄羊のももを開き、斧、鑿、鋸、(陸生の) カメ、金と銀の (水生の) カメをそのなかに入れ、それを縛り、川へ投げ入れる。唱えごとをして、この川岸で第2回目の口洗いが行われる (ニネヴェ版には口洗いの記述が抜けているが、おそらくここで第2回目がなされたと考えられる)¹⁹。

II (エア-アサルヒ) - シャマシュ段階 (II-5～II-6) (N95-204, B12-59)

続いて川岸から庭・果樹園 (*kirû*) へ、像は行列によって移動する (II-5)。そしてアーシブが神像の手を取り、庭 (果樹園) へ運び入れる (II-6)。庭には、葦の小屋と葦の天幕 (スタンダード) が円環状に設置され、その中央の葦の敷物のうえに像が置かれる。像は、東の方向へ視線を向けるよう設置される。アーシブは川へ行き、川のなかにマツハトゥ小麦粉を投げ入れ、ミッフビールを捧げ注ぐ。口洗いのための容器にタマリスクやナツメヤシの芯、ネズ、ラピスラズリやほかの石、油、蜂蜜、バターなどさまざまなものを入れて準備して、3回目の口洗いが行われる。神像の左右に神々への供え物が置かれ、祈禱が捧

¹⁹ Berlejung 1998, 234.

げられ、さらに口洗いが続く。

神像が庭（果樹園）で東向きに置かれたまま第1日目が終了する。戸外で神像は一晩を過ごすことになるが、その間集中的に神像の口洗いがなされる。翌日、葦の小屋のなかにエア、シャマシュ、アサルヒのための3つの玉座が準備され、祈捧が捧げられ、口洗い（バビロニア版では13回目）が行われる。神像の周囲で5回の「手を挙げる祈り」（シュイラ）のほか、浄化の儀礼やささやきの祈り、シャマシュへの祈り、神像の王冠や衣装への祈りなどが唱えられる。

III 神殿段階（III-7～III-11）（B59-65）

神殿での神（像）の即位に関するIII段階の記述は、ニネヴェ版では失われており、バビロニア版から読み取ることができる。庭（果樹園）での供え物が片づけられたあと、神像はそこから神殿の門へと行列によって移動する（III-7）。そのあいだに唱えごとが朗誦される。神殿の門では、供え物が捧げられる（III-8）。その後神殿の門から神殿のなかの至聖所（内陣）へ行列が続く（III-9）。そして内陣の座に神像が設置される（III-10）。第14回目（最後）の口洗いが行われる。この後、アーシブはアプスーの埠頭へ行き、そこで浄化の儀礼を行い、口洗い儀礼の全行程が終了する（III-11）。

口洗いおよび口開けは、3段階に分けられる儀礼全体で、I, II, IIIのすべての段階で行われる。そのうちバビロニア版では、第I段階のエア段階に2回、第II段階の（エア-アサルヒ）-シャマシュ段階に11回、第III段階の神殿段階に最後の1回がなされている。ニネヴェ版でも、5回記述があるうち、4回がIIの段階に実行されている。ここからみても、II-6の庭（果樹園）の場面が、儀礼全体のなかで最も重要であるといえる。

このことは、バビロニア版では、IIの段階が全体のなかで最も長いことから裏付けられる。このIIの段階の庭（果樹園）において、像は夜を越すことになるが、バビロニア版では、全部で14回行われる口洗いのうち第3から第13回の11回分がこの庭で行われ、そのうち12回目までが夜中に実行される。とくにそのなかの7回の口洗い（第6から第12回目）は、夜の星々のために供え物を捧げて、「タマリスク、清らかな木」という唱えごとを唱えたあとに連続してなされ

ており、夜の星座と像との関連が密接になっている。

おそらくこの夜にかけて行われる7回分の口洗い（および口開け）が、ニネヴェ版には抜けていると考えられる。というのもニネヴェ版では、バビロニア版の第5回目と並行する第3回目²⁰の口開けのあと、次に行われるのは翌日になってからと記されているからである。

このようにII-6の段階において、この儀礼に最も特徴的なことがらが展開されている。ここで夜を越し、星々と関連づけられつつ、翌朝朝日をあび、シャマシュと向き合う神像は、大きな変容を体験する。実際の口洗いと口開けが繰り返し行われることにより、職人の手によって制作された神像が、生きている神へと変容してゆく過程が浮き彫りとなる。神像から神への変容過程にあたり、「通過儀礼」の特徴を明確に示す。ここで唱えられる祈祷の内容からも同様に重要性が読み取れるので、以下で検討する。

4. 儀礼のあいだに唱えられる祈祷・唱えごと

先に述べたように、この儀礼においてアーシブにより唱えられる祈祷や呪文などの文言は、儀礼文書（式次第文書）ではなく、祈祷文言をあつめた粘土板が別に存在し、そこに記されている。儀礼文書のほうには、その文言の表題（祈祷の最初の言葉）が書かれ、唱えるべき内容は祈祷文言に書かれている。ベーレユングによると、唱えられる祈祷の文言は内容によって8種類に分類される²¹。

- (1) 儀礼で使うもの、道具、材料に関する祈祷・唱えごと。
- (2) 祈祷祭司のための浄化の祈祷・唱えごと。
- (3) 別の一連の儀礼からの祈祷・唱えごと。
 - ・ ナンブルビ（除災儀礼）の祈祷。
 - ・ *ki'utukku*の祈祷。王の儀礼(*bīt rimki*)のときによく唱えられる。

²⁰ しかしニネヴェ版で抜けている82-87行の部分に、並行するバビロニア版には口開けがあることから想定すると、そこに第2回目の口開けがあったと考えられるため（Berlejung 1998, 234）、現在の3回目はおそらくは4回目とみなされる。

²¹ Berlejung 1998, 197-205.

太陽神に対する祈祷であり、新しく作られた神像／神への祈祷ではない ([KI.^dUTU(KAM)])。

- (4) 「手を挙げる祈り」(シュイラ)。神像の口開けのあいだに特別に唱えられる。
- (5) 儀礼文書のなかに詳述された短い朗唱や祈祷・唱えごと。
- (6) 儀礼像のレガリアのための祈祷・唱えごと。
- (7) 行列の祈祷・唱えごと。
- (8) 神殿と諸設備のための祈祷・唱えごと。

5. 「手を挙げる祈り」(シュイラ)

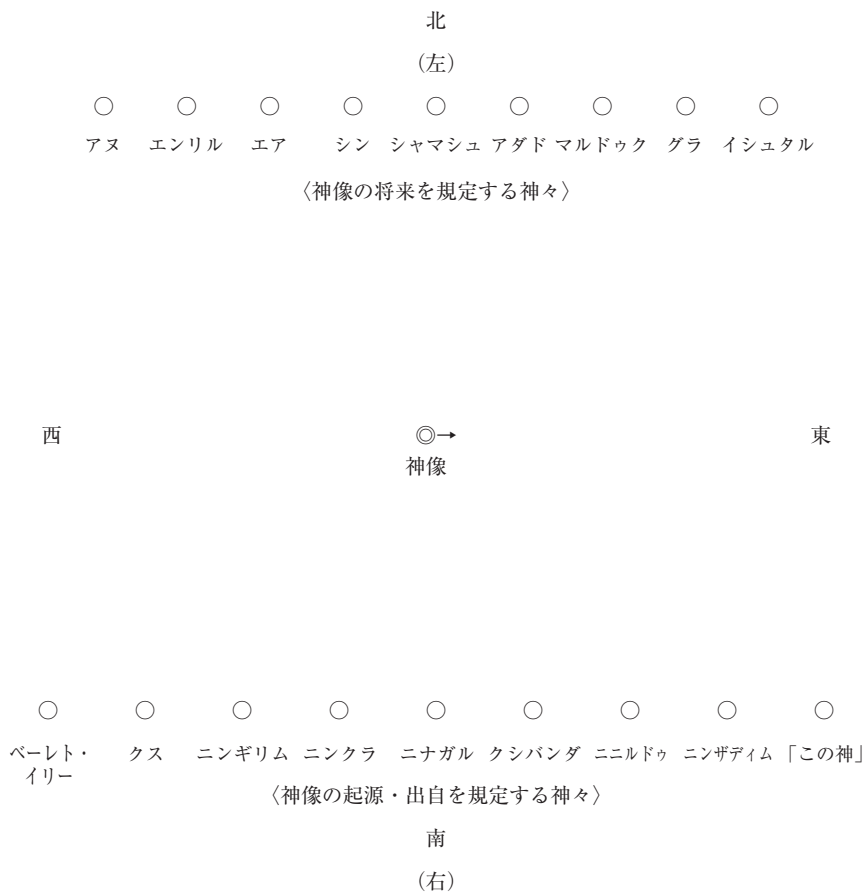
5.1. II-6で唱えられる5回の「手を挙げる祈り」

以上の8種類に分けられる祈祷・唱えごとのうち、ここでは(4)の「手を挙げる祈り」(シュイラ)に注目する。シュイラ (ŠU.ÍL.LÁ) というのは「手を挙げる」という意味で、手を挙げながらの祈りをさす²²。ニネヴェ版、バビロニア版ともに、口洗い儀礼のなかで最も重要な場面、II-6の庭(果樹園)での段階において、アーシブが5箇所での「手を挙げる祈り」を唱えるよう指示があり、神像の周辺で唱えられる内容は、像の変容に密接にかかわっている。4回目に唱えられるべき祈りのテキストはこれまで発見されていないが、他の4つの文言からは、神像の口開けがどのようにとらえられていたか、神像がどのように理解されていたかが読み取れる(試訳を本文のあとに掲げる)。

アーシブは神像の周辺を移動しながら手を挙げる祈りやささやきの祈りを唱えているが、その内容を考察するため、神像とアーシブの位置を確認しよう。II-6庭(果樹園)における像の位置は、儀礼文書から以下のようになる²³。

²² Mayer 1976, 7-8, 31; Zgoll 2003, 21-23; Oshima 2011, 11-14など。

²³ Berlejung 1988, 228.



II-6 庭における神像の位置

1日目、庭（果樹園）には、葦の小屋と葦の天幕が円環状にたてられている。神像は亜麻布の布地 (*tapsû*) のなかで（のうえの）葦の敷物のうえに置かれている（N 96）²⁴。神像は、彼の目が東の方向を向くように設置され（N97// B13）²⁵、そのそばに供え物が置かれる。バビロニア版によると北側に、アヌ、エンリル、エア、シン、シャマシュ、アダド、マルドゥク、グラ、イシュタルのための9つの供え物が置かれる（B25-26）。ニネヴェ版によると、同様の神々のために9つの香炉の容器が金星（宵の明星）のほうに置かれる（N100-102）。このあと「タマリスク、清らかな木」という唱えごとのあと、口洗いと口開けがなされる。他方、南側にはベーレト・イリー (*Dingirmah/ Ninmah*)、クス、ニンギリム、ニクラ、ニナガル、クシバンダ、ニニルドゥ、ニンザディム、「この神」のための9つの供え物が置かれる（B27-28）。ニネヴェ版では同様の神々のために、夜の神々のほうに9つの香炉の容器が置かれる（N105-106）。そして口洗いと口開けが執り行われる。

戸外で天上の星と関連しつつ口洗いが集中的になされて一夜が過ぎたあと、翌朝、エア、シャマシュ、アサルヒのための玉座と供え物用の卓が設置され、菓子やビールなどが供えられる。ネズの香炉がふりまかれ、羊の犠牲が捧げられ、祈りが唱えられる。「天においてみずから生まれる」（N133// B42）、「シャマシュ、天と地の偉大なる主」（N134// B42）、「命の水、高まる流れ」（N135// B43）、「大水、その神の業は比類なく、清らかである」（N137// B44）という言葉で始まる祈りである。さらに続いてアーシブはこの神（像）の左側に、エア、シャマシュ、アサルヒの前に立ち、「シャマシュ、（天と地の）偉大なる裁判官」（N143// B46）という唱えごとをする。さらに「エア、シャマシュ、そしてアサルヒ」（N144// B47）の唱えごとをしたあと、1回目の手を挙げる祈り①「神が作られたとき、清らかな像が完成されたとき」が唱えられる。その後口洗いが

²⁴ *tapsû*に対する唱えごとから判断すると（Borger, R. 1973: Die Weihe eines Enlil-Priesters, in: *Bibliotheca Orientalis* 30, 163-183）、この布地は神性のしるし（*me-te-nam-dingir-ra*）だという。ベーレユングはボルガーの説を取り入れ、頭部の覆いとみなし、ここで神像は頭部には亜麻布の覆いがかかけられているととらえている（Berlejung 1988, 221, 441）。さらにWalker/Dick 2001, 59, n.81.

²⁵ バビロニア版によると、I-4の川岸では神像は西向きに置かれていた（B6）。

行われ（ニネヴェ版では5回目、バビロニア版では13回目）、2回目の手を挙げる祈り②「偉大なメを備えた清らかな像が完成された。すべてにおいて完璧である」が続く。

2回の手を挙げる祈りのあと、浄化の儀礼(*takirtu*)とささやきの祈り(*liššu*)が行われる。そのささやきは、ニネヴェ版によると、はじめは神像の右耳へ(N166)、次に左耳へなされるので(N172)、ささやきの祈りの前に、アーシブは神像の左側から右側へ移動する。ささやきの祈りの途中で、アーシブは神像の左側へ移動し、神像の左耳に祈りささやく。このあと職人たちの誓約が続く。

その後、アーシブは神像の前に立ち(N187)、バビロニア版によると神像の目を開けたあと、3種類の手を挙げる祈りを神像に向かって唱える。③「あなたが現われると」、④「清らかな場所で生まれた像」、⑤「天において生まれた像」という句で始まる祈りである。4回目の祈りのテキストはないが、これら祈りのあとにもさまざまな唱えごとが続く。とくに衣装や王冠、玉座など神像に属するものを讃える祈りがあることも注目される。このあと神々への供え物が片付けられ、II-6は終了し、神像は神殿の門へと移動する。

5.2. 職人—職人の神々—エア

手を挙げる祈り（シュイラ）のテキストを読むと、神像の起源（出自・由来）を述べる文言が、4箇所のテキストすべてに見いだされることが注目される²⁶。これは、神像がどこで、誰の手によって、どのような材料で作られたのかということがきわめて重要だということを示すものである。

「この像は、銅細工師(*gurgurru*)の技によって *hulālu* 石, *hulāl īni* 石, *muššāru* 石, *pappardillû* 石, [*pappardildillû* 石, *dušû* 石] 貴重な石, *hulālu parrû* ……琥珀, *antasurrû* 石からなる」(シュイラ①65ab-68ab) という句からは、銅細工師の技術により、さまざまな石が神像に用いられていることが読み取れる。このほか、鍛冶師、金属細工師といった職人たちも、神像制作に関与していること

²⁶ Berlejung 1988, 231-239.

が述べられている。

儀礼文書において、神像を制作した職人たちは *ummānu* といわれている (N55, B5, N173, B49, B58など)。この *ummānu* は、職人、職工、技術者、専門家、学者という職種をあらわすが、その意味は広い²⁷。古代メソポタミアにおいて神殿に勤務しそこでの仕事に従事する職人たちは、専門的な訓練を受け高い技術や知識を有する職種に属する人々だった。知恵の神、工芸の神エアによって靈感を得て作業するとみなされ、王からも財政的援助を得ていた学職ある人々だった²⁸。したがって鍛冶職人や銅細工師、石工など、神像や儀礼像の制作に関与した職人たちは、特別視されていた。職人そのものがエアによって創造されたものととらえられているが、さらに職種によって職人の守護神、パトロンが存在し具体的な作業を支援する。

59ab この像は、ニンクラが作った目を持っている。

60ab この像は、ニナガルが作った……を持っている。

61ab この像は、ニンザディムが作った顔つきを持っている。

62ab この像は、クシバンダが作った金と銀からなる。

63ab [この像は、]ニニルドゥが作った……

64ab [この像は、]ニンザディムが作った……

65ab-68ab この像は、銅細工師 (*gurgurru*) の技によって *ḫulālu* 石, *ḫulāl īni* 石, *muššāru* 石, *pappardillū* 石, [*pappardildillū* 石, *dušū* 石] 貴重な石, *ḫulālu parrū* ……琥珀, *antasurrū* 石からなる。

69 ab この像は、ニンクラ、ニナガル、クシバンダ、ニニルドゥ、ニンザディムが作った (シュイラ①59ab-69ab)。

このように最初の手を挙げる祈りでは、ニンクラ *Ninkurra*, ニナガル *Ninagal*, ニンザディム *Ninzadim*, クシバンダ *Kusigbanda*, ニニルドゥ *Ninildu*

²⁷ AHw 1415f; CAD U/W (2010) 108-115, *ummānu*.

²⁸ Berlejung 1996, 145-149; Berlejung 1988, 112-113. さらに Borger 1956 82; Espak 2010, 160-214 など参照。

という職人の神々が登場し、彼らがさまざまな材料（石や金属など）や道具を用いて神像の各部分を作ったといわれている（シュイラ①87-88も同様）²⁹。

ニクラは、銅細工師・宝石細工師（*qurqurru*）を庇護する神である。「この像は、ニクラが作った目を持っている」（シュイラ①60ab）といわれているように、*qurqurru* は、神像の制作においてはおもに神々の目をさまざまな石を用いて作ることに従事する³⁰。ニナガルは、金属細工師、鍛冶師（*nappāḫu*）の神である。像の内部の木造の芯をたたいてやわらかした銅でおおう（めっきする）作業を行う³¹。ニンザディムは、石工（*purkullu / zadimmu*）を援護する神である³²。彼もまた、神像、儀礼像の制作におおきく関与する。ニンザディムの課題は、儀礼像の石の部分を、注意深く入念に仕上げること。そこには、像の眉毛、ひげ、頭髮も含まれるという。ニンザディムは、クシバンダと同様、装飾品の制作も手掛ける³³。クシバンダは、金細工師の庇護者である³⁴。ニルドゥは職人の神で、とくに指物師、木工品の専門職人の仕事を見守る神である³⁵。像のなかの木造の芯を作ったり、像の胴体部分を作ったりする。このような職人の神々が神像の各部分を作ったことが述べられている。

2番目の手を挙げる祈りでも、アヌの偉大なる鍛冶職人が、さまざまな石を用いて像を作ったと言われている（シュイラ②104-109）。3番目の祈りでも、ニルドゥがアヌの大工とよばれ、金の斧やツゲの手斧で像を注意深く制作したと言及されている。斧、鋸、鑿など職人たちの道具も清らか、高貴といわれている（シュイラ③1ab-8ab）³⁶。

このように、神像を制作した職人、職人の神々、そしてエアとの関係性が強

²⁹ Berlejung 1988, 115-116では、これらの職人の神々が Ea-Hypostasen（エアのヒュポスタシス（「下に立つもの」）、実体化）といわれている。

³⁰ Berlejung 1988, 125.

³¹ Berlejung 1988, 132.

³² Berlejung 1988, 126によると、Ea-Hypostase である。

³³ Berlejung 1988, 126-131.

³⁴ Berlejung 1988, 135.

³⁵ Berlejung 1988, 120.

³⁶ 儀礼文書では、川岸で職人の道具が川へ投げ入れられることが述べられている（N78-80// B8-9）。

調されている。鍛冶師、彫刻師、石工などの職人は、その庇護者である職人の神々によって守られており、はじめに人間（職人）と職人の神々が制作した新しい神像はこれらによる共同作業で作られたととらえられている。工房で新しく作られた像は、高い技術や知識にもとづいた儀礼像である。

この一方で、2番目の手を挙げる祈りのあとのささやきの祈りで、「きょうからあなた（＝神像）の運命が神的なものとなされますように。あなたの兄弟の神々のなかにはあなたは数え入れられるでしょう」（Incantation Tablet 3, Section C 8-10）³⁷とあり、新しく制作された神像が、口洗い儀礼の2日目には神性が含まれ、神として運命づけられてゆくといわれている。そしてすでに天上にいる神々の兄弟となる、つまり、天上の神々の共同体の一員として統合されることとなり、像の属する場所が地上から天上へと変化していくことが示唆される。ニネヴェ版の儀礼文書のなかにも同様の文言がある（N167-168）。

さらに興味深いのは、このあとに続く儀礼文書の文言である。バビロニア版では、

- 49 （あなた [=アーシブ] は）退く。そして、この神に近づいた職人たちと
 50 彼らの道具を、ニクラ、ニナガル、クシバンダ、
 51 ニニルドゥ、ニンザディム、[……]（のほうへ？）[持って行く]そして、
 彼らの手を布で
 52 縛る。そしてタマリスクの木（で作った）剣で（それらを）切り落とす。
 ……あなたは（彼らに）「私は彼を作らなかった。エアの鍛冶師であるニナガルが彼を作った」という唱えごとを言わせる（B49-52）。

とある。ニネヴェ版でも、職人は、

- 179 「私は（この像を）作らなかった」（と私は誓う）。

³⁷ Walker/ Dick 2001, 147.

- 180 ニナガル, エア (エアであるニナガル) [……]
- 181 「私は (この像を) 作らなかった」, 「私は (この像を) 作らなかった」
(と私は誓う)。
- 182 大工の神エア (である), ニニルドゥが[それを作った……]
- 183 「私は (この像を) 作らなかった」, 「私は (この像を) 作らなかった」
(と私は誓う)。
- 184 鍛冶師の神エア (である), クシバンダが[それを作った……]。
- 185 ……の神エア (である), ニンクラが[それを作った……]。
- 186 ……の神エア (である), ニンザディムが[それを作った……] (N179-186)。

と誓うよう指示されている。これは、職人とその道具を、ニンクラをはじめとする職人の神々のほうへ近づかせ、職人の手を布で縛り、タマリスクの剣で切りつけるという象徴的行為、さらに「私はこの像を作らなかった」という言葉により、職人自身は神像制作に関与しなかったこと、職人の神であるニナガルやニニルドゥが制作したということを宣誓させる状況をあらわしている。卓越した職人の技がたたえられたあとで、職人は作った痕跡を自ら消さなくてはならないのである。職人が神像制作に関与したことが次第に消されてゆき、職人の神々と知恵の神エアが神像を完成させたことが前面に押し出されてくる。

2番目の手を挙げる祈りでは、

- 113 スギ, イトスギ, 油, 山の蜂蜜で, 彼ら (=アサルヒとエア) はあなた (=神像) の口を開ける。
- 114 清らかな水, 洗浄の水で, 彼はあなたの頭に注ぎかける。
- 115 創造をもたらす清らかな油で, 彼はあなたの口に触れる (シュイラ② 113-115)。

とあり、アサルヒとエアによる神像の口開けが述べられている。口開けのほ

か、頭への水注ぎや、口への塗油は、像の浄化を強調する。

そして3番目の手を挙げる祈りでは、

17ab エア、広い知恵の主は、あなたの頭を持ち上げた。

18ab 彼はあなたの神性を完成させた。

19ab 彼はあなたの口に食べ物を置いた（シュイラ③17ab-19ab）。

といわれ、エアによる神の完成が述べられている。神として食べ物が与えられ、口開けにより食することができるようになっている。

神像は、はじめはこの世で人間（職人）と職人の神々による共同作業によって作られるが、口洗いの所作やささまざまな祈り、職人たちの宣誓をとおして純粹性、清浄性が強調され、天上において神として生まれるととらえられてゆく。新しい生命を得て天上の神々の共同体のなかへ統合されることとなる。

さらに手を挙げる祈りのあと、シャマシュに向かって唱えられる *ki'utukku* の祈りがあり、新しい神が純粹な場所に生まれ出る際、シャマシュが救済の神託を語るだろうといわれている。II-6の後半ではシャマシュが前景に出てくる。こうして職人、職人の神々、エア、シャマシュと神像との関係がさまざまに唱え、語られながら儀礼が進行してゆく。口洗いの水と関連して川・水の神エアと太陽神シャマシュの強調が際立つ。

以上のような手を挙げる祈り、ささやきの祈り、*ki'utukku* などそのほかの唱えごと、そして口洗いと口開け、浄化の儀礼は、II-6の庭で夜中の集中的な口洗いと口開けのあと、翌朝、東向きに置かれた神像のまわりでなされている。ベーレUNGが指摘するように、翌朝太陽の光を受けるように立つ神像は、ファン・ヘネップが明らかにした通過儀礼における境界状況、過渡的な状態にある。2日目、太陽の光を受け、シャマシュとの結びつきも強くなってゆく。

またベーレUNGは、II-6の庭での神々と神像との位置関係について、北側の神々は、この儀礼で扱われている新しい神像の将来を規定する神々、他方、南側の神々は神像の起源・出自を規定する神々ととらえている。たしかに南側のほうは職人の神々であり、神像の制作者として神像の出自を規定し、この口洗

いの儀礼の過程では、過去の部分となる。それに対して、神像から神へと変容するなかで、この像は北側の神々と同列となってゆくため、北側の神々は像の今後の位置や機能にかかわるといえるだろう。また東側の方向を向く神像にとり、南側に位置する職人の神々は、右側になる。古代オリエントの思考において、右と左では右が肯定的な位置とされるが、この段階では、北側の神々より南側にいる職人の神々のほうが神像に近い関係にあることが示されているという。とくに今回制作された神像のための供え物もこの南側に設置されることからそのように考えられるだろう³⁸。

6. 通過儀礼による神像の変容

6.1. 諸感覚の付与

口洗い、口開けにより新しい機能の付与およびその開始が暗示されるが、さらに神像の口だけでなく、「目を開ける」こともアーシプが行うと儀礼文書に書かれている (B53)。これは、像が生きている人間のように諸感覚を持つようになることにつながる。

たとえば嗅覚については、はじめにあげたように「この像は、口開けがなければ、香をかぐことができない、パンを食べることも水を飲むこともできない」という祈りの文言から(シユイラ①70ab-71ab)、口開けによって香を焚いた香りを感じたり、食事を味わったりすることができるようになると理解される。さらにその直前にささやきの祈りが神像の左右の耳になされているのは (N166, N172, B49)、神像の聴覚が作動し始めることを示唆する。それから神像の目を開けるという行為が続くことを鑑みると、嗅覚、味覚、聴覚に続いて視覚がそなわっていくととらえられる。バビロニア版では、目を開けるという時点ですでに13回の口開けが実施されている。

こうして制作された像に諸感覚が次第にそなわり、魂が宿り、さらに神性

³⁸ Berlejung 1998, 228-229.

(*ilūtu*) が与えられ (Incantation Tablet 3, Section C 8-10; N167-168; シュイラ③ 17ab-19ab), 生きた神として天上で生まれる過程が読み取れる。しかもアーシブはそれまでは神像の周囲で立ち振る舞っていたが, その目を開けるときにはじめて神像の面前に立ち, 像と向かい合う。連続する祈りを通して像は純粹に神的な力をもったもの, 神性をもった像として現れるので, アーシブはこの状況で像の前に直接向かい合って立ち, 続いて3回目の手を挙げる祈りを語りかけることになる³⁹。ここでさらに一段階, 過渡の状態 (神像と神の中間の存在) が深まった, 同時に神的存在としての諸機能の統合へ向かったと考えられる。

6.2. メの付与

職人が作ったという痕跡をなくしてゆく一方, 像には「メ」(me) が付与されていくことも像の変容に関して重要である。

「メ」とは, メソポタミア世界にとってきわめて特徴的な概念である。神の力, 力の根源などととらえられるが, 神々や人間の思考や営為を本質的に規定し⁴⁰, 神々や人間の具体的な属性や特徴, 性質, 標章を示す。メによって力や権力, 支配力などがもたらされる。

II-6の庭での段階で唱えられる手を挙げる祈りの2番目は, 「偉大なメを備えた清らかな像が完成された。すべてにおいて完璧である」(シュイラ②100) というテキストではじまっているが, メを付与された像は完璧だといわれている。5回の手を挙げる祈りのあとには, 「高貴な衣装……」, 「高貴な王冠」, 「清らかな玉座」という唱えごとが続くが, これは, 神像に衣装や王冠が備わり, 神として玉座に即位してゆく展開を表している。この段階で, 同様にメも神像に付与されてゆくと考えられる。さらにIIIの段階の神殿において, 実際に神として即位する際にはメが十分備わっているだろう。

また, ME.LÁM/ *melammu* という語も同様にメと関連する。輝き, 光を意味するが, 畏怖, 恐怖をもたらすものでもある。

³⁹ Berlejung 1998, 236-237; Walker/Dick 2001, 66, n. 118.

⁴⁰ Farber 1987-1990, 610-613; Farber-Flügge 1973, 117-124; Berlejung 1998, 20-24; 113-114など。

51ab 彼（＝神）は輝きを放ち、威厳に満ち、誇りにあふれていた。

52ab 彼は光輝（*melammu*）にかこまれ、畏怖をもたらす顔つきを放っている。

53ab 彼はつねにすばらしく輝き、清らかな像はまばゆい（シュイラ① 51ab-53ab）。

この文言からは、神が有する輝きは畏怖をもたらし、清らかな、純粋な神像はまばゆく光を放つといわれている。光、輝き、まばゆさ、純粋さ、清らかさは神性の特徴である⁴¹。

6.3. 分離・過渡・統合の過程

先行研究でもすでに指摘されているように、この儀礼において神像がたどる変容の過程は「通過儀礼」の特徴を示す。

A. ファン・ヘネップは、ある状態から別の状態へ、またはある宇宙のもしくは社会的な世界から他の世界への移動に際して行われる儀式上の連続を分類、分析し、そのような移行に関する儀礼を「通過儀礼」として体系的に論じた（1909年）。古今東西のさまざまな事例に基づき、通過儀礼は分離、過渡、統合という3つの段階から構成されるということを総体的に論証した研究は、儀礼に関する理論を系統づけたものと評価されている。ファン・ヘネップが導き出した構想の重要な点は、人間のみならず、宇宙や自然においても一定のリズムにしたがった移行や変化があることを踏まえ、天界や季節の発展段階や推移に関する儀礼にも、人の出生、加入、結婚、死などに関する儀礼と同様の特徴があり、これらも通過儀礼とみなされるとした点である。「個人も社会も自然や宇宙から独立した存在ではなく、その宇宙自体が、一定のリズムに従っており、

⁴¹ ほかに「（あなた＝神像に）固有の輝きが与えられますように」（シュイラ⑤36ab）、「あなた（＝神像）は、あなたの光り輝く玉座へつきますように」（シュイラ⑤40ab）といった文言も神の変化を示唆している。

このリズムは、人間の生活にも余波を及ぼすことになるのである」⁴²。人間が経験する儀礼と、年中行事などの季節や暦による儀礼を別個に扱うのではなく、人間と人間を取り巻く環境との連関を包括的、動的にとらえ、それらの推移や循環の儀礼も通過儀礼として把握すべきだという。

ファン・ヘネップは、以前の世界からの分離の儀礼をプレリミネール儀礼、過渡期に執り行われる儀礼をリミネール儀礼、新世界への統合に際しての儀礼をポストリミネールと名づけた。そして、分離、過渡、統合という3つの段階(儀礼)のなかでも、過渡的な状態、境界状況を経て新しい段階へ統合されることを強調している⁴³。口洗い儀礼においてもそのような特徴が見いだされる。2日間にわたる儀礼では、分離、過渡、統合の儀礼が直線的に続くのではなく、それぞれの段階が何度も反復されて進んでゆく。

職人たちの工房から川への行列 (I-3)、川岸から庭 (果樹園) への行列 (II-5)、庭から神殿の門へ (III-7)、神殿の門から内陣 (玉座) へ (III-9) という神像の行列は、場所の移動、変化という点では分離の儀礼だが、移動の過程そのものは過渡の儀礼とみなせるだろう。分離と過渡の段階が何度も繰り返されていることが明らかである。しかもそれぞれの段階はファン・ヘネップが指摘しているように、重複する場合もある。儀礼のなかのある所作は両義的な意味をもち、複数の段階にまたがることもありうる。

行列によって場所を変えつつ、過渡の儀礼が繰り返し行われていることが注目される。神像が境界状況に置かれている段階が重視されているのである。この儀礼で最も重要かつ象徴的な——それゆえ儀礼の名称ともなっている——口洗いおよび口開けの所作は、過渡の儀礼とみなされる。I, II, III のすべての段階において口洗い、口開けが行われていることは、神像は過渡の状態を繰り返しながら(深めながら)、最終的に天上の神々の共同体へ統合される過程を強調する。II-6の庭の段階で、神像が葦の小屋のなか、(亜麻布でおおわれ?) 葦の敷物の上に置かれ地面に足が触れていないのは、地上の世界にも天上の世界にも

⁴² ファン・ヘネップ2012, 14-15.

⁴³ ファン・ヘネップ2012, 23, 235, 244-255ほか。

属していないことを表し、過渡の状態にあることを示す⁴⁴。V. ターナーが論じた「リミナリティ」(境界的な状況)にあるといえる⁴⁵。その状況にあって口洗いと口開けがなされる。とりわけ一夜を越す際に集中的になされる口洗いは印象的な過渡的状況、境界状況である。その際、シン(月の神)をはじめとして土星や水星のほか、天体への供え物が捧げられ、宇宙の星々と神像との統合も行われ、過渡の儀礼と統合の儀礼が結びつく。続く翌朝の祈りや語りかけも境界状況にある神像/神に向けられている。その後神殿の門へ移動し、神殿の玉座に即位する過程は統合の儀礼へとつながる。また、先に述べた、開眼の所作やささやきの祈りによる視覚や聴覚など諸感覚の付与やメの付与も、過渡および統合の過程とみなすことができ、3つの儀礼段階が重なりあいつつ展開している。

P. ボーデンは、この口洗い儀礼、とくにバビロニア版の儀礼内容を、プレリミネールの段階から、分離の儀礼、リミネールの段階、最終的な移行(過渡)の儀礼、ポストリミネールの段階まで5段階に分けて、直線的な移行段階が続く儀礼、単一の通過儀礼ととらえた⁴⁶。だが、そこには繰り返される過渡期の重要性に対する認識が不足していると思われる。

ベーレングはボーデンとディックの説を批判しながら、I, II, III の段階すべ

⁴⁴ ファン・ヘネップ(2012, 235-236)によると、過渡期の儀礼では一定時間足を地につけてはいけな「かつぎ上げ」という慣習がほとんど普遍的にみられるとしているが、これもそれにあてはまるだろう。

先に触れたが、II-6の庭(果樹園)の段階のはじめで、神像は葦の敷物のうえ、亜麻布のなかに置かれているが(N96)、ベーレングは、これは神像の頭部が布地でおおわれているとみなしている。もしそうなら、さらに神像の過渡の状態を強調するといえる。この状態を経たあと、神像の覆いがいつはずされるのかは、文書からはっきりとは読み取れないが、おそらくII-6の段階の最後あたりではなからうか。というのは、手を挙げる祈りのなかの「エア、広い知恵の主は、あなたの頭を持ち上げた。／彼はあなたの神性を完成させた。／彼はあなたの口に食べ物を置いた」(シュイラ③17ab-19ab)、「浄めの祭司であるエアのアプカル祭司があなた(=神像)の頭を持ち上げた。／シャマシュがあなたの真実な決定のために配慮しますように。／(あなたに)固有の輝きを与えられますように」(シュイラ⑤34ab-36ab)といった文言から、このあたりで覆いははずされ神像は直接太陽の方向を見ることになると考えられるからである(Berlejung 1998, 249もこのあたりを想定している)。ターナー 1996, 125-130ほか。

⁴⁶ Boden 1998, 170-220. このボーデンの説をうけて、Walker/ Dick 1999, 72-83ではバビロニア版儀礼文書の内容をを分離、過渡、統合の3段階に分けている。

てで、分離、過渡、統合の儀礼が行われているとする⁴⁷。分離の儀礼は、神像の現世的、世俗の出自（由来）を解除することに関連する。つまり、職人が像を制作したということを消すためになされる。過渡の儀礼は、神像を超現世的・超世俗的な本質へと変化させる。像の超現世的・超世俗的な本質とは、さまざまな宇宙の領域をみずからひとつにし、メを意のままにし、メを所有し、あらゆる必要な知覚能力を所有することである。統合の儀礼は、神像／神が社会的関連、つまりそれが機能する世界へと統合される目的のために行われる。そこには、神々、王、国、神殿といった要素が属する⁴⁸。

このようにファン・ヘネップの理論は、さまざまな儀礼研究で応用されている。しかし、自然や宇宙の時間の推移や季節の移り変わりに関する儀礼と、人間の生死、成長過程に関する儀礼をあわせて通過儀礼として包括的にとらえるべきというファン・ヘネップの考察は、一部のみが理解され、宗教学や文化人類学、民俗学などでは、人間の通過儀礼、人生儀礼の特徴として挙げられるようになった⁴⁹。このような研究動向に対し、ファン・ヘネップの理論に正しく立ち戻るべきだという意見がある。この世に生をうけ、自然や天体の環境のなかで成長し、衰退する過程を通過する人間の側と、人間の一生を節目ごとに区切って、それにちなむ儀礼を行う側（通過させる側）との「すり替え」が、近代宗教学において行われているからだという⁵⁰。ファン・ヘネップは、すべての事柄の変容が、季節の変化も人間の成長、生と死も含めて通過儀礼であると主張していることに注意する必要がある。

そこで、バーレユングの考察に儀礼の主体に関する視点、および神像と天体の変化や移行の相関的な関係という論点を明確に加えるなら、通過儀礼としての口洗い儀礼の特徴がさらに説得性をもって理解できるだろう。この儀礼で

⁴⁷ Berlejung 1998, 255-257.

⁴⁸ Berlejung 1998, 257.

⁴⁹ たとえば柳川1989, 36-40; 田中2011, 137-139など。

⁵⁰ 渡辺2011, 138-140; さらに渡辺は、たとえば葬式が通過儀礼であるとされる場合、死にゆく人自身の「通過」ではなく、残された人が行う葬式が通過儀礼とされてしまうことに「主体のすり替え」が見られると指摘している（2016年1月の筆者の問い合わせに対する返答のメール内容による）。

は、儀礼の主体（儀礼の通過者）は神像だが、天体の推移に関連させて儀礼が展開してゆくことに注目すると、天体も儀礼に加わっていることが明らかで、ファン・ヘネップの包括的な通過儀礼理論の特徴が浮き彫りになる。儀礼執行者アーシブが唱える、「シャマシュ、天と地の偉大なる主」（N134// B42）、「命の水、高まる流れ」（N135// B43）といった祈りから、自然や天体も儀礼に参加していることがうかがえるのである。さらに、神像に対して手を挙げる祈りを5回唱えたあと、太陽神シャマシュに対して祈りを発していることも意義深い。「行きなさい、立ち止まらないでください」（N195// B56）という唱えごとは（*ki'utukku*）、太陽もこの儀礼を通過していることを示す。夜中の口洗いの所作、夜の星々との統合、太陽の移行との共鳴など、神像（神）も宇宙という環境のなかでその推移や変容を通過してゆくことが、ダイナミックかつ重層的に行われている。

こうして儀礼の参加者たちが川から庭へ、庭から神殿へ移動することと、太陽や星の推移などが、あわせて複合的にとらえられる。移動する場所——口洗いのための水を供給する川、日の出が生じる庭など——から、命をもたらす水、新しい命の誕生などが想起され、エアやシャマシュが儀礼に参加し、神像とともに変容、移行してゆくと理解される。

アーシブが儀礼の通過者（神像）に対して行う所作や祈りの言葉からも分離、過渡、統合の過程が明らかだが、さらに、儀礼執行者とは別に、職人たちが登場することも通過儀礼の意味を深めている。職人たちが「自分たちはこの像を作らなかった」という誓約をし、像と職人との関係を断ち切ることは、神像にとって分離の儀礼といえる。3段階の過程を重層的に通過するなかで、とくに中間状況である混沌状態、両義的状況では、死と再生、浄・不浄、明と暗といった象徴的意味も認められる。

おわりに

この口洗い儀礼で興味深いのは、自然や宇宙の推移とともに神像が生きた神としてとらえられてゆく過程である。人間（職人たち）が作った像が神々によ

るもの、次第に神そのものとみなされてゆく変容が、儀礼のなかで展開している。最初に述べられていた制作者のうち、職人と職人の神々による製造の刻印は取り除かれ、像はエアによって完成されたものと理解されてゆく。分離、過渡、統合の段階を繰り返しながら、最終的には、作られた神像から生命をもった神として、天上の神々の共同体の一員と認められ、神殿に即位する。天において新しく神が誕生したことが神々によって讃えられ、将来の祝福をも願われている（シュイラ⑤36ab-47ab）。儀礼像、神像、神というイメージの変容、地上的な存在から天上的な神の誕生が、工房、川、庭（果樹園）、神殿の門、神殿、玉座、あるいは地上、アプスー、天上といった諸空間と境界を移動しながらの一連の儀礼のなかで進んでゆくのである。2日間かけて行われる途中で、神像の置かれる方向が西（日没）から東（日の出）へと移行することは、太陽神シャマシュも儀礼に参加しその前で神像の変容が起こること、そしてシャマシュと神像との協働関係、生と死という両義性などを際立たせる（シュイラ③12ab、⑤35abなど）。儀礼の根底にあるのは、知恵の神、工芸・技術・創造の神、アプスーの神エア（口洗いの水と関連する）、および太陽神シャマシュがともに儀礼に加わり、一定のリズムをもった関係性のなかで新しい神像が規定され生動化してゆく過程、清らかな天で神が誕生する過程である。

この神像の口洗い儀礼の意味に関しては、女神ベーレト・イリーの妊娠や出産に関連させた解釈も興味深い論点を含むが⁵¹、制作者としての職人、職人の神々、エアのあいだの関連性、さらにシャマシュによって新しい神が新しい機能を発揮してゆく経緯など、神像が変容し神として生まれ、立ち現れる通過儀礼の特徴のほうがより納得できる。ファン・ヘネップが理論づけるはるか以前から、古代メソポタミアの人間も宇宙や自然の変化のリズムを感じ取り、ある状態から別の状態への移行の際には境界状況を通過しそれから新しい段階に統合されることを認識していた。神像が諸感覚、諸機能、メを得て新しい生へと変容してゆく過程にあわせて、アーシプたちは儀礼を捧げてきたのである。

⁵¹ Ebeling 1931, 100-102; Jacobsen 1987, 15-32; Boden 1998, 195-196; Hurowitz 2003, 147-157など。笠谷2012, 13-17で先行研究についての再検討がなされている。

アーシブが唱える祈りの言葉には、神像を変容させる力、行為遂行性(パフォーマンスティヴィティ)がある⁵²。祈祷・唱えごとの文書をさらに分析し、儀礼における像・イメージの変容に祈りや呪文の文言がどのように働くのか今後も考察を進めてゆく必要がある。

最後に、比較宗教史学の視点による像・イメージ研究の可能性も指摘しておこう。この口洗い儀礼に関しては、ヒンドゥー教の灌頂儀礼と比較した考察がある⁵³。日本人なら仏教の開眼供養との類似性を容易に思い浮かべることもできる⁵⁴。コンセクラティオ(奉獻, 聖化, 聖別), 水などによる浄化, 灌頂儀礼などの宗教儀礼に用いられる像の役割や機能などを比較しながら, 像・イメージ, 表象の意義を考察する必要がある。さらに儀礼によるイメージの変容については, ものに生命が宿るという観点から, 神の姿をめぐっての考え方(アントロポモルフィズム)という概念との関連性も指摘できる。また神像のみならず, 王や支配者の像, 儀礼像, 奉納者の像などの相違にも留意すべきである。表象, 再現としてのイメージに関しては, 何かを意味する・表す記号表現と, 意味された・表された意味内容という2つの関係が成立しない場合もありうる。記号としての像・イメージという働きは, その限られた一機能である⁵⁵。像やもの, 物体の生動化, 変容についてはさまざまな事例にもとづいた考察が不可欠である。

⁵² 細田2014では宗教美術の行為遂行性について述べたが, それだけでなく儀礼全体において包括的に捉える必要がある。また祈りについては棚次1998, 258-293; 細田2013, 170-173; 儀礼におけるパフォーマンスティヴィティについては, ドルチェ/松本編2010, 3-28などを参照。

⁵³ Winter 2000 = Winter 2009, Vol. II, 377-404。さらにエジプトの口洗い儀礼や他の宗教の浄化儀礼などについては, Dick (ed.) 1999; Frevel/ Nihan (eds.) 2013; 森編2014の所収論文などを参照。

⁵⁴ 松島2001, 95; Ozaki 2008, 221-222; 笠谷2012, 18-20など。

⁵⁵ 細田2013, 170-173。

口洗い儀礼で唱えられる「手を挙げる祈り」

① 手を挙げる祈り（シュイラ） N160 // B47

Incantation Tablet 3, STT 200, Lines 49-97: Walker/ Dick 2001, 135-144; 149-151;
Berlejung 1998, 449-451.

- 49ab 唱えごと：神が作られたとき，清らかな像が完成されたとき，
50ab 神¹があらゆる国のいたるところにあらわれたとき，
51ab 彼は輝きを放ち，威厳に満ち，誇りにあふれていた。
52ab 彼は光輝 (*melammu*) にかこまれ，畏怖をもたらす顔つきを放っている。
53ab 彼はつねにすばらしく輝き，清らかな像はまばゆい。
54ab 彼は天において作られた，地において作られた。
55ab この像は天と地のどちらにおいても作られた。
56ab この像はイトスギの森のなかで大きくなった。
57ab この像は山の清らかな場所から出てきた。
58ab この像は神々と人間の顔つきをしている。
59ab この像は，ニクラが作った目を持っている。
60ab この像は，ニナガルが作った……を持っている。
61ab この像は，ニンザディムが作った顔つきを持っている。
62ab この像は，クシバンダが作った金と銀からなる。
63ab [この像は，]ニルドゥが作った……
64ab [この像は，]ニンザディムが作った……
65ab この像は，*hulālu* 石，*hulāl tni* 石，*muššāru* 石，
66a *pappardillū* 石，[*pappardillū*石，*dušū* 石] 貴重な石，
66b *hulālu parrū* []
67ab 琥珀，*antasurrū* 石から，
68ab 銅細工師 (*gurguru*) の技によってなる。
69ab この像は，ニクラ，ニナガル，クシバンダ，ニルドゥ，ニンザディムが作った。
70ab この像は，口開けがなければ，香をかぐことができない，
71ab パンを食べることも水を飲むこともできない。
72a アサルヒはそれを見た。彼の父エンキに（言った）。
73a 父よ，この像は，まだ口開けがなされていません。
74a エンキは息子のアサルヒに（言った），何をあなたは知らないのか。
75a アサルヒよ，何をあなたは知らないのか。私が知っていることをすべて。行き

¹ アッカド語では「神々」。

なさい、息子よ。

- 76ab エリドゥの中心からもたらされたアプスーの水、
77ab 清らかな場所からもたらされたティグリスの水、ユーフラテスの水、
78ab タマリスク、サボンソウ、ナツメヤシ、*šalālu* 葦、多彩色の沼地の葦、
79ab 7本のパルム（ヤシ）の若枝、ネズ、白いスギを、そのなかへ投げ入れなさい。
80ab 清らかな果樹園の庭の水路に、ビート・リムキ（浴場）を作りなさい。
81ab 清らかな果樹園の水路から、ビート・リムキへそれを運びなさい。
82ab この像をシャマシュの面前へ運び入れなさい。
83ab 彼に触れた斧、彼に触れた鑿、彼に触れた鋸、
84ab 彼に触れた職人たち（DUMU.MEŠ *um-ma-ni*）……
85ab 頭飾り（かぶりもの）で彼らの手を縛りなさい。
86ab タマリスクの剣で、彼に触れた銅細工師（*qurqurru*）の手を切りつけなさい。
87/88 この像は、ニンクラ、ニナガル、クシバンダ、ニニルドゥ、ニンザディムが作った。
89/90 クス（Kusu）、エンリルの浄めの祭司は、浄められた水の器、香炉、松明で、
彼（クス）の清い両手で、それ（像）をきれいにした。
91a アサルヒ、エリドゥの息子は、それ（像）を輝かせた。
92/93 アブカル祭司とエリドゥのアブリク祭司が、蜂蜜とバター（ギー）で、スギと
イトスギでもって、あなたの口を7回かける2回開けた。
94 この神は天のように清らか、地のように清らかとなりますように。
95 天の中心のように輝きますように。
96 悪い舌はわきへ退きますように。

② 手を挙げる祈り（シュイラ）N162 // B48

Incantation Tablet 3, Rm 224, Section B 100-119; Sm 290, Section C 1-5: Walker/ Dick 2001, 145-146; 152; Berlejung 1998, 452-453.

- 100 唱えごと：偉大なメを備えた清らかな像が完成された。すべてにおいて完璧である。
101 ……生まれた。山は近づかなかった。
102 ……彼らが名づけるように。
103 ……立派に完了した。
104 ……アヌの偉大なる鍛冶師
105 ……の石が、あなたをやさしく手入れした。
106 銅……
107 ……指があなたを握る。

- 108 *hulālu* 石、カーネリアン、ラピスラズリ、それらを彼があなたのために作った。
 109 それは清らかで輝くように。
 110 エア、偉大なる王子、天と地の鍛冶師、広大な知恵の主、
 111 (彼は) エリドゥのアブスーから金属細工師を作った。
 112 アサルヒ、エリドゥの息子、天と地のすべての神々の王、
 113 スギ、イトスギ、油、山の蜂蜜で、彼らはあなたの口を開ける。
 114 清らかな水、洗浄の水で、彼はあなたの頭に注ぎかける。
 115 創造をもたらす清らかな油で、彼はあなたの口に触れる。
 116 羊の柵囲いから身代わりのヤギ、
 117 生きている羊、子ヤギ、彼の香炉のための松明、
 118 香炉と松明を彼はあなたに持ち出した。
 119 アブカル祭司とエリドゥのアブリク祭司……

③ 手を挙げる祈り (シュイラ) N188 // B53

Incantation Tablet 4, Lines 1-20: Walker/ Dick 2001, 158-163; 184; Berlejung 1998, 454-455.

- 1ab 唱えごと：あなたが現われると、
 2ab 森のなかの木のようにあなたが大きくなると、
 3ab あなたの手……、アヌ……
 4ab ニニルドゥ、アヌの大工
 5ab あなたに触れた斧は偉大である。
 6ab あなたに触れた鑿は高貴である。
 7ab あなたに触れた鋸は清らかな鋸である、神々によって鋭くとがれている。
 8ab 金の斧で、ツゲの手斧で、彼はあなたを注意深く手入れした。
 9ab 清らかな亜麻布のおおいをかぶせなさい。
 10ab あなたはあなたの神殿のよい守護神となりますように。
 11ab あなたの神殿の至聖所であなたが確固たるものとなりますように。
 12ab シヤマシユがあなたの真実な決定のために配慮しますように。
 13ab エリドゥの息子アサルヒがあなたの口へ唱えごとを与えた。
 14ab イシップ祭司、パシーシュ祭司、アブカル祭司、エリドゥのアブリク祭司が、
 蜂蜜とバター（ギー）で、
 15ab スギとイトスギでもって、あなたの口を7回かける2回開けた。
 16ab 彼らは、エリドゥの唱えごとの水をあなたのうえに注いだ。
 17ab エア、広い知恵の主は、あなたの頭を持ち上げた。
 18ab 彼はあなたの神性を完成させた。
 19ab 彼はあなたの口に食べ物を置いた。

④ 手を挙げる祈り（シュイラ）N189 // B54

清らかな場所で生まれた像。

テキストなし。

⑤ 手を挙げる祈り（シュイラ）N190 // B54

Incantation Tablet 4, Lines 23-65: Walker/ Dick 2001, 163-171; 184-185; Berlejung 1998, 456-458.

23ab 唱えごと：天において生まれた像²，

24ab 山から，清らかな場所から……

25ab 母なる山のティグリス川は，

26ab その中心から清らかな水をもたらした。

27ab ベーレト・イリー，大地の母は，

28ab 清らかなひざからあなたをもたらした。

29ab アヌの偉大な石工であるニンザデムは，

30ab 彼の清らかな両手で，彼はあなたを注意深く手入れした。

31ab 手足を作った³ LĀL³は，

32ab あなたを清らかな場所へ置いた。

33ab 彼女（LĀL³）は，唱えごとの水をあなたのうえに注いだ。

34ab 浄めの祭司であるエアのアプカル祭司があなたの頭を持ち上げた。

35ab シヤマシュがあなたの真実な決定のために配慮しますように。

36ab （あなたに）固有の輝きを与えられますように。

37ab あなたは……

38ab あなたはその *uṣumgallu* ドラゴンとなりますように，そしてその言葉が国に満ちあふれますように。

39ab あなたは輝かしく即位しますように。

40ab あなたは，あなたの光り輝く玉座へつきますように。

41ab あなたが歩む神殿が開きますように。

42ab あなたの……の神殿が……

43ab あなたの……が喜びとなりますように。

44ab あなたの[群れ?]は，たくさんの牛，たくさんの羊でありますように。

² アッカド語では「アヌが作った像」。

³ Berlejung 1998, 456 n. 2030 は，Borger, Zeichenlexikon Nr. 170 の説 ^{dingir}LĀL = *alam(m)uš* に異議をとなく，LĀL は ³Lāl.hur.gal. zu = Bēlet-ilī または ⁴⁰Lāl.an.na = Nin.sikil.lá の短縮形であろうとみなしている。そしてBēlet-ilīはすでに27行目に言及されているので，Ninsikilla ととらえている。Walker/ Dick 2001, 184 ではThe goddess LĀL.

- 45ab あなたが住む神殿が、すべて清らかとなりますように。
- 46ab あなたの高められた至聖所においてすべてが止まることはありませんように。
- 47ab あなたの名前の家が慎重に選ばれた家となりますように。
- 48ab 豊富な食事でもって、そのなかでふるまっています。
- 49ab あなたの輝かしい家畜小屋では、雌牛や子牛がモーモーとなぎますように。
- 50ab あなたは、その人の雌羊が輝かしい子羊を産むような人物となりますように。
- 51ab あなたは、その人の黄色いヤギが黄色の子ヤギを産むような人物となりますように。
- 52ab あなたは、その人の果樹園がとて多くの蜂蜜と葡萄酒をもたらすような人物となりますように。
- 53ab 産物をもたらす山が、あなたをもたらしますように。
- 54ab 産物をもたらす山や畑地が、あなたをもたらしますように。
- 55ab 産物をもたらす果樹園が、同じく（あなたをもたらしますように）。
- 56ab 魚と鳥をもたらす網が、同じく（あなたをもたらしますように）。
- 57ab 豊かさをもたらす山や、広大さをもたらす海が、同じく（あなたをもたらしますように）。
- 58ab あなたの母ニントゥ（Nintu）の清らかなひざのうえへ
- 59ab 清らかな亜麻布のおおいをかぶせなさい。
- 60ab あなたはあなたの神殿のよい守護神となりますように、
- 61ab あなたの神殿の至聖所であなたが確固たるものとなりますように。
- 62ab あなたの住みか、永遠の住みかで平安にとどまっています。
- 63ab あなたによって愛されたシンが、あなたを愛しますように。
- 64ab エンキとニンキの心が、あなたに対して安らかでありますように。

口洗い儀礼の構成

	N ニエヴェ版 (行)	N 口洗い+口開け	B バビロニア版 (行)	B 口洗い (+口開け)
I エア段階: 浄化とエアの前での儀礼の準備	<1-94>		<1-12>	
I-1 郊外, 庭, 町, 神殿での準備	1-54			
I-2 職人の工房 (作業場)	55-64		1-4	
		N58 第1回目		B2 第1回目
I-3 工房から川への行列	65-69		5-6	
I-4 川岸で	70-94		6-12	
B6 神像は西向きに。		(N82-87の抜けている部分に第2回目?)		B11第2回目
エアの前でのパラダイム的な境界状況				
II [エア・アサルヒ]-シャマシュ段階: 宿任をともなった本来の口開け	<95-204>		<12-59>	
II-5 川岸から庭 (果樹園) への行列	95		12	
II-6 庭 (果樹園) で	95-204このあと消失		12-59	
(1日目)	<95-108>		<12-36>	
N97 神像は東向きに。				B24 第3回目
シャマシュの前でのパラダイム的な境界状況		N104 第2回目(3?)		B26 第4回目
Ea-Kapelle, Ekarzagina		N108 第3回目(4?)		B28 第5回目
				B29 第6回目
				B30 第7回目
				B31 第8回目
				B33 第9回目
				B34 第10回目
				B35 第11回目
				B36 第12回目
(2日目)	<109-204>		<37-59>	
		N150 第4回目(5?)		
		N161 第5回目(6?)		B47 第13回目
		N163-166/ B48 浄化の儀礼とささやきの折り (神像の左耳と右耳へ)		B48 浄化の儀礼
		N167-171 右耳へのささやき		
		N172// B49, 173- 左耳へのささやき		B49 ささやきの折り
		N179// B52職人の誓約		
				B53 目を開ける
III 神殿段階: 神殿での即位			<59-65>	
III-7 庭 (果樹園) から神殿の門への行列			59	
III-8 神殿の門で			60	
III-9 神殿の門から内陣 (至聖所・玉座) への行列			60-61	
III-10 内陣 (至聖所) への安置		(第7回目?)	61-65	B63 第14回目
III-11 アプスーの埠頭へ			65-66	B65 浄化の儀礼
			奥付	

参考文献

- Beerling, A. 1996: Der Handwerker als Theologe. Zur Mentalitäts- und Traditionsgeschichte eines altorientalischen und alttestamentlichen Berufsstands, in: *Vetus Testamentum* 46, 145-168.
- 1997: Washing the Mouth: The Consecration of Divine Images in Mesopotamia, in: K. van der Toorn (ed.), *The Image and the Book: Iconic Cults, Aniconism, and the Rise of Book Religion in Israel and the Ancient Near East*, Leuven, 45-72.
- 1998: *Die Theologie der Bilder. Herstellung und Einweihung von Kultbildern in Mesopotamien und die alttestamentliche Bilderpolemik*, Göttingen.
- Black, J.A./ Green, A. 1998: *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia: An Illustrated Dictionary*, London.
- Boden, P.J. 1998: *The Mesopotamian Washing of the Mouth (mīs pī) Ritual: An Examination of Some of the Social and Communication Strategies which Guided the Development and Performance of the Ritual which Transferred the Essence of the Deity into Its Temple Statue*. Ph. D. Johns Hopkins University.
- Borger, R. 1956: *Die Inschriften Asarhaddons, Königs von Assyrien*. AfO Beiheft 9, Graz.
- Dick, M.B. (ed.) 1999: *Born in Heaven, Made on Earth. The Making of the Cult Image in the Ancient Near East*, Winona Lake.
- 2003-2005: Pīt pī und Mīs pī, in : *RIA* 10, 580-585.
- 2005: The Mesopotamian Cult Statue. A Sacramental Encounter with Divinity, in: Walls, N.H. (ed.), *Cult Image and Divine Representation in the Ancient Near East*, Boston, 43-67.
- Ebeling, E. 1931: *Tod und Leben nach den Vorstellungen der Babylonier*, Berlin/ Leipzig.
- Espak, P. 2010: *The God Enki in Sumerian Royal Ideology and Mythology* (PhD diss.), Tartu.
- Farber, G. 1987-1990: me, in: *RIA* 7, 610-613.
- Farber-Flügge, G. 1973: *Der Mythos "Inanna und Enki" unter besonderer Berücksichtigung der Liste der me*, Rome.
- Frevel, C./ Nihan, C. (eds.) 2013: *Purity and the Forming of Religious Traditions in the Ancient Mediterranean World and Ancient Judaism*, Leiden/ Boston.
- Guichard, M./ Marti, L. 2013: Purity in Ancient Mesopotamia. The Paleo-Babylonian and Neo-Assyrian Periods, in: Frevel/ Nihan (eds.) 2013, 47-113.
- Hurowitz, V.A. 1989: Isaiiah's Impure Lips and Their Purification in Light of Akkadian Sources, in: *Hebrew Union College Annual* 60, 39-89.
- 2003: The Mesopotamian God Image, from Womb to Tomb, in: *Journal of the American Oriental Society* 123 (1):147-157.

- Jacobsen, T. 1987: The Graven Image, in: *Ancient Israelite Religion*, Philadelphia 15-32.
- Mayer, W. 1976: *Untersuchungen zur Formensprache der babylonischen "Gebetsbeschwörungen"*, Rome.
- Oshima, T. 2011: *Babylonian Prayers to Marduk*, Tübingen.
- Ozaki, T. 2008: Divine statues in the Ur III kingdom and their "ka du_s-ha" ceremony, in: Michalowski, P. (ed.), *On the Third Dynasty of Ur. Studies in honor of Marcel Sigrist*, Boston (Mass.) : American Schools of Oriental Research, 217-222.
- RIA : *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*.
- Sallaberger, W. 2006-2008: Reinheit, in: *RIA* 11. 295-299.
- Selz, G. 1997: 'The Holy Drum, the Spear, and the Harp' : Towards an Understanding of the Problems of Deification in Third Millennium Mesopotamia, in: Finkel, I.J./ Geller, M.J. (eds.) 1997: *Sumerian Gods and Their Representations*, Groningen, 167-209.
- Walker, C./ Dick, M.B. 1999: The Induction of the Cult Image in Ancient Mesopotamia: The Mesopotamian *mīs pī* Ritual, in: Dick, M.B.(ed.)1999, 55-121.
- Walker, C./ Dick, M.B. 2001: *The Induction of the Cult Image in Ancient Mesopotamia: The Mesopotamian Mīs Pī Ritual*, Helsinki.
- Winter, I.J. 2000: Opening the Eyes and Opening the Mouth. The Utility of Comparing Images in Worship in India and the Ancient Near East, in: Winter, I.J. 2009, Vol. II, 377-404.
- Winter, I.J. 2009: *On Art in the Ancient Near East* (Volume I: Of the First Millennium BCE, Volume II: From the Third Millennium BCE), Leiden.
- Zgoll, A. 2003: *Die Kunst des Betens. Form und Funktion, Theologie und Psychagogik in babylonisch-assyrischen Handerhebungsgebeten an Ištar*, AOAT 308, Münster.
- 笠谷美穂2012「古代メソポタミアの神像儀礼研究にみる課題」『東洋英和大学院紀要』8, 7-24.
- ターナー, V. 1996『儀礼の過程』富倉光雄訳, 新思案社(新装版)。
- 田中正隆2011「儀礼と分類——人はどのように人生を区切るのか?」奥野克巳／花瀨馨也編『文化人類学のレッスン』学陽書房, 131-152.
- 棚次正和1998『宗教の根源——祈りの人間論序説』世界思想社。
- ドルチェ, ルチア／松本郁代編2010『儀礼の力——中世宗教の実践世界』法藏館。
- ファン・ヘネップ, A. 2012『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳, 岩波書店。
- 細田あや子2013「祈りの言葉とイメージの力」栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版, 160-177.
- 2014「異時空間を往還するキリストの身体」栗原隆編『感性学——触れ合う心・感じる身体』東北大学出版会, 213-235.

松島英子2001『メソポタミアの神像——偶像と神殿祭儀』角川書店。

森雅秀編2014『アジアの灌頂儀礼』法藏館。

柳川啓一1989『宗教学とは何か』法藏館。

渡辺和子2011「ギルガメシュの異界への旅と帰還——「英雄」と「死」」『死生学年報
2011』リトン, 135-164.